

## 中国都市部の幼児の生活と親の育児観, 育児行動の変容 —大連市における経済発展初期と現在との比較—

Changes of Preschool Children's Life, Nursing Consciousness and  
Nursing Behavior in City Area of China : Compare the Early Years  
of Economic Development with the Present Time in Dalian

田 中 敏 明                      胡                      金 生                      白                      琳 琳

Toshiaki TANAKA

Jinsheng HU

Linlin BAI

幼児教育講座

遼寧師範大学心理学院

(株) メイコーフーズ

(平成25年9月2日受理)

経済発展により大きく変容した中国都市部において子どもの生活や親の育児観, 育児行動がどのように変化したのかを明らかにするため, 発展した都市部の代表的地域のひとつである大連市を対象に, 市場経済政策が開始されて間もない1994年と, それから15年以上が経過した現在(2011年)との比較を行った。その結果, 子どもの生活では, 起床・就寝時間が遅くなる, 幼稚園以外での友達とのかかわりが減少する半面親とかかわる時間が増える, テレビやゲームに費やす時間が増えるなどの傾向が, 親の育児観, 育児行動では, 育児の主体が少しずつ母親に移行する, 高学歴志向がより顕著になる一方で子どもに対する期待がより現実的になる, 育児の心配事の内容が変化する, 子どもを甘やかす傾向が強くなるなど, かなり大きな変化が認められた。

キーワード: 中国都市部, 経済発展, 幼児の生活, 親の育児, 変容

### 1. 目 的

子どもの生活や親の育児観は, 子どもや親を取り巻く社会的状況(文化, 価値観, 経済的状況など)の影響を受ける。したがって, 国による違いがあり, 同じ国の中でも地域による違いが生じてくる。

田中, 照屋(1996)は, 1994年, 幼児を持つ親を対象に日本と中国の幼児の生活と親の育児観を調査し, 次のような違いを見出している。調査は3歳から6歳までの幼児を持つ親を対象に, 日本の場合は幼稚園と保育所, 中国の場合は幼稚園を通して配布したものである。

日本と中国の主な違いをあげると, 調査用紙に記入するのは, 日本では母親が圧倒的に多く, 中国では父親と母親が約半数ずつである。

家族形態では, 1世代あたりの家族数は日本で

は4人家族が多く, 中国は3人家族が半数以上を占める。日本では家族数6人以上の世代が全体の2割から3割を占め, 中国と比べるとかなり多くなっている。祖父母が同居している割合も日本が高い。とくに日本では, 農村部の約6割が祖父母との同居家族であり, 地域差がかなり大きい。幼児の起床と就寝時間には両国の間でかなり明確な違いがある。中国では, 幼児の9割が七時まで起床し夜9時までに就寝する子どもの割合が日本よりかなり高い。とくに小学生で非常に高くなっている。

登下校(園)については中国では幼稚園児の30%が朝7時までに, 45%が7時から7時半までの間に登校する。日本の登校時間のピークは幼児で8時半から9時の間である。なお, 中国では子どもが幼稚園で宿泊する制度がある。

帰宅後の生活では、夕食までの間は日本の場合「家の内外で兄弟や友達と遊ぶ」が圧倒的に多く、中国では「家の中でひとりで遊ぶ」が目立つ。また、中国では、農村部の子どもに戸外遊びが多いが、日本では逆に農村部の子どもの戸外遊びが比較的少なくなっている。

進学と将来の職業への期待は、中国では多くの親が子どもに大学以上への進学が希望し、また医学部への進学を望む親が多い。日本では男児には大学まで、女児には短大まで望む親が多い。中国では高学歴や高い社会的地位は「名誉なこと」という意識が強い。

老後の生活設計では、理想とする老後の生活形態は日本と中国で大きな違いがあり、日本は多くの親が「夫婦だけで生活する」ことを望み、逆に中国では「子どもや孫と同じ家で生活する」ことを望む。ただ、日本では地域差がかなり大きく、農村部では「子どもや孫と同じ家で生活する」ことを望む親が約6割に達する。

この調査から15年以上が経過し、中国社会はとくに都市部を中心に大きな変貌を遂げた。経済的には、1992年から市場経済に移行し、都市部住民の所得が飛躍的に向上した。調査を行った大連市の例でみると、サラリーマンの平均年収は、1994年が約7,400元（約100,000円）だったのに対し2011年では約49,700元（約750,000円）と7倍以上に増加している。それに伴い、経済格差も非常に大きくなり、少しでも高い収入を得て豊かな暮らしを求める志向も強くなっている。経済発展に伴い、欧米や日本などからフランチャイズ店やブランド店が進出し、自家用車を求めるようになるなど、生活の高級化、欧米化が進んでいる。欧米の育児情報も以前に比べると目に触れやすくなっている。

子どもの生活や親の育児観の変容にかかわるもう一つの大きな要因として一人っ子政策がある。一人っ子政策は1978年に開始されている。すなわち、1994年当時は、子どもは一人っ子であっても親の多くは兄弟に囲まれて育っている。しかし現在では、親のほとんどは一人っ子政策実施以降に生まれており、一人っ子が一人っ子を育てているのが現状である。

このような大きな状況の変化は、子どもの生活や親の育児観、育児行動に大きな変化を及ぼしているものと思われる。そこで今回は、1994年の調査と同じく大連市において、同一の調査用紙を用いて、子どもの生活と親の育児観、育児行動を調査し、その変容の実態を明かにする。

## 2. 方 法

### (1) 調査の対象

大連市内の3歳から6歳の幼児を持つ親

有効回答者数：

1994年 805名(7幼稚園 公立5園私立2園)

2011年 494名(4幼稚園 公立2園私立2園)

### (2) 調査の時期

1994年6月～9月

2011年10月～11月

### (3) 調査の方法

幼稚園のクラス担任を通して、子どもが自宅に持ち帰るという方法で保護者に調査用紙を配布した。

### (4) 調査の内容

調査項目は次のとおりである。

子どもの生活

- ・起床と就寝の時間及び方法・登園、降園時間・降園後および休日の生活・遊びの様子・親子のかかわり

育児観、育児行動

- ・子どもへの期待・子どものしつけかた
- ・育児の心配事、心配事の相談相手
- ・少子、高齢化への思い

## 3. 結果と考察

### アンケート調査の回答者

配布した調査用紙に誰が回答しているかをみると（表1）、今回は約7割が母親による回答である。1994年は父親と母親が同数（45.3%）であったことと比べると大きな変化である。1994年のころは、母親もごく一部を除いて就労しており三交代勤務者も多かったこと、家事も育児も父親母親が分担するという意識が強かったことから、アンケートなどの回答においてもどちらか時間のあるほうが書くということだったのではないだろう

表1 調査に回答した者（%）

	父親	母親	父親と母親	その他
1994年	45.3	45.3	4.2	5.3
2011年	14.6	70.1	9.9	5.4

か。現在は、母親の就労率や夜間勤務者の減少などから、「父親は仕事、子どものことは母親に任せる」という、かつての日本と似た状況に近づいてきたのかもしれない。その一方で、父親と母親が相談して答える者もわずかながら増加している。

#### 幼児の生活

中国の都市部では、幼稚園での保育時間は午前8時から午後6時までであり、朝食と夕食を提供するところが多く、現在でもこの現状は1994年当時とほとんど変わっていない。一方で、一人っ子の割合は1994年の88.1%から2011年の94.2%へと増加し、ゲーム機などの普及も著しい。こうした状況の中で、幼児の生活はどのように変化しているのだろうか。

生活の基本である起床と就寝の様子を見てみよう。

1994年には、90.8%の幼児が7時までに起床し、67.1%は9時までに就寝していた。これが2011年にはそれぞれ62.3%、42.1%に減少している。かつて中国の子どもの生活は「早寝・早起き」が大きな特徴であったが、次第に日本などの状況に近くなっている。ベネッセ教育総合研究所(2011)によると、現在の日本の幼児は53.1%が朝7時までに起床し、55.7%が夜9時までに就寝するから、とくに就寝時間では日本の幼児より遅くなっている。

これには次のような原因が考えられる。まず、正確な数字は出されていないものの、父親の収入が増加するに伴い母親の就労率が低下したこと、就労していても夜間や早朝に勤務する母親が減少したことである。つまり、朝ゆっくりと子どもを送り出すことができる。次に、進学競争の激化に伴い、宿題や課題を出す幼稚園が増えていることである。こうした状況の変化は、後に紹介する母親と子どもの接触時間が増加した原因ともなっている。

起床時に自分で起きる幼児(1994年74.8%→2011年42.0%)、寝具の片づけを自分でする幼児(1994年48.4%→2011年2.2%)の割合も大きく減少している。1994年の調査では、寝具の片づけを自分でする日本の幼児の割合は3.9%であり、ほぼ同じような状況になってきている。朝早く自分で起きて自分で寝具の片づけをし、早くから登園するというかつての中国の幼児独自の姿はいまではあまり見られない。

平日帰宅後の生活をみると(表2)、家の内外で一人で遊ぶ幼児の数が増加する一方で友達と遊

表2 帰宅後の生活

	1994	2011
家の中で一人で遊ぶ	76.6	81.8
家の外で一人で遊ぶ	11.8	23.0
家の中で友達と遊ぶ	18.2	5.6
家の外で友達と遊ぶ	39.0	22.8
一人で勉強する	34.3	17.2
家庭教師と勉強する	3.8	0.8
塾やおけいこごとに行く	2.2	4.4
ほとんど何もしない	1.3	0.6

表3 休日の生活

	1994	2011
家の中で一人で遊ぶ	49.2	44.1
家の外で一人で遊ぶ	14.4	6.8
家の中で友達と遊ぶ	21.8	7.0
家の外で友達と遊ぶ	37.2	7.0
一人で勉強する	19.3	10.4
家庭教師と勉強する	3.8	0.8
塾やおけいこごとに行く	2.0	1.7
テレビを見たり音楽を聴く	57.8	35.2
父親と遊ぶ	30.7	43.7
母親と遊ぶ	43.2	46.6
祖父母と遊ぶ	18.8	14.9
家族で出かける	36.9	56.1
ほとんど何もしない	1.3	0.6

ぶ幼児の数が減少している。幼稚園では長時間の友達とのかかわりがあるとはいえ、幼稚園を離れて友達とかかわる機会は以前も含めて少ないというのが1つの特徴である。保育を受ける時間が長いというのも理由の一つと考えられるが、休日では友達とのかかわりはもっと少なくなる。休日の生活では一人遊びや友達遊びが減少し、家族と触れ合う機会が増加しているのが特徴的である。

遊びの内容をみると(表4)、一人遊びでテレビやゲームが増えたこと、男児の友達遊びで体を動かす遊びが増えたことなどが目につくが、全体としてあまり大きな変化はない。親との遊びで体を動かす遊びがあまりないこと、勉強が上位に来ることなどは中国的な特徴として変わりなく継続している。

次に親子がかかわりあう時間を見てみよう。平日でも多くの父親、母親が1時間以上幼児とかかわるというのが以前からの特徴である。今回もこの傾向に大きな変化はないが、3時間以上かかわ

表4 子どもの遊びベスト5

	男 児		女 児	
	1994 年	2011 年	1994 年	2011 年
1人遊び	① 積み木, ブロック, パズル ② 玩具 ③ 砂, 水, 泥遊び ④ 自転車, 三輪車 ⑤ 運動遊び	① 玩具 ② テレビ ③ 絵, 塗り絵 ④ 積み木, ブロック, パズル ⑤ ゲーム	① 玩具 ② 積み木, ブロック, パズル ③ 運動遊び ④ 砂, 水, 泥遊び ⑤ 絵, 塗り絵	① 玩具 ② テレビ ③ 絵, 塗り絵 ④ 積み木, ブロック, パズル ⑤ ゲーム
集団遊び	① 玩具 ② ごっこ遊び ③ 積み木, ブロック, パズル ④ 砂, 水, 泥遊び ⑤ 運動遊び	① 自転車, 三輪車 ② 運動遊び ③ 玩具 ④ 砂, 水, 泥遊び ⑤ 公園の遊具	① 運動遊び ② 玩具 ③ ままごと ④ 積み木, ブロック, パズル ⑤ ごっこ遊び	① ゲーム ② 自転車, 三輪車 ③ 運動遊び ④ ままごと ⑤ 砂, 水, 泥遊び
父親と	① 絵本, お話 ② ゲーム ③ ごっこ遊び ④ トランプ ⑤ 運動遊び	① ゲーム ② ごっこ遊び ③ 自転車, 三輪車 ④ テレビ ⑤ トランプ	① 絵本, お話 ② トランプ ③ 勉強 ④ ゲーム ⑤ ごっこ遊び	① ゲーム ② 勉強 ③ 絵本, お話 ④ 積み木, ブロック, パズル ⑤ 歌を歌う, 楽器を弾く
母親と	① 絵本, お話 ② 勉強 ③ ゲーム ④ 積み木, ブロック, パズル ⑤ トランプ	① 絵本, お話 ② 勉強 ③ ゲーム ④ 積み木, ブロック, パズル ⑤ テレビ	① 絵本, お話 ② 勉強 ③ あやとり ④ 歌を歌う, 楽器を弾く ⑤ ままごと	① 絵本, お話 ② 勉強 ③ ゲーム ④ 歌を歌う, 楽器を弾く ⑤ テレビ

表5 平日に親子がふれあう時間（父親と）

	ほとんどない	1時間未満	1時間以上 2時間未満	2時間以上 3時間未満	3時間以上
1994 年	6.0	19.9	43.6	20.6	9.9
2011 年	5.9	29.3	30.8	15.5	18.5

表6 平日に親子がふれあう時間（母親と）

	ほとんどない	1時間未満	1時間以上 2時間未満	2時間以上 3時間未満	3時間以上
1994 年	2.9	12.3	39.8	24.3	20.5
2011 年	2.3	6.2	22.0	24.3	45.2

るという母親がかなり増えている。父親の場合、3時間以上かかる父親も若干増える一方で、1時間未満という父親の数も多くなっている。父親への仕事の比重が増しているという背景が考えられる。

#### 一人っ子をめぐって

1976年に一人っ子政策が開始されて35年以上が経過しているが、子どもが一人っ子であることをどのように考えているのだろうか。理想とする子どもの数を尋ねてみた。

1994年では、全体の3分の1近くが2人を理想としており、一人っ子を肯定する者は3分の1にとどまっている。2011年になると一人っ子を

表7 理想的な子どもの数

	1人	2人	3人	4人
1994 年	31.6	64.4	0.8	0.3
2011 年	39.7	58.1	1.7	0.5

肯定するものが若干増えるもののさほど大きな増加ではなく、過半数の親は依然として子ども2人を望んでいる。

それでは一人っ子にはどのような問題があると考えているのだろうか。一人っ子であることが子どもにとって問題があると思うことを尋ねてみた。

1994年の時点では、「甘やかされてわがままに

なる」と考える親が8割以上を占め、一人っ子は「小皇帝」と呼ばれてわがままになることが非常に心配されていた。2011年でも依然として5割以上の親が問題だと感じているものの、数字はかなり減少している。自分も一人っ子として育ってきたけどわがままにはなっていないということなのだろうか。それに代わって、遊び相手がいないなどの現実的な問題をあげる親が最も多くなっている。

つぎに、一人っ子であることを意識して気を付けていることについてみてみよう。特徴的な変化として目につくのは、かつて割合の高かった「親孝行の大切さをしっかり教える」、「規則を守ingことをしっかり教える」、「人のためにつくすことの大切さを教える」など、子どもに教えるというやりかたの割合が減少し、「友達と積極的にかかわることを子どもに勧める」、「友達と出会う機会を作る」、「地域の子どもの行事に参加させる」、「親子が一緒にする機会をできるだけ多くする」、「勉強よりも遊びを大切にする」、「家のお手伝いを多くさせる」などが増えている。現実体験を伴う機会を与えることが大切だと考える親が多くなったのだろうか。「子どもに期待をかけすぎないようにする」とう親の割合が増える一方で「できるだけ厳しくしつける」という親の割合はかなり減少している（表9）。

#### 子どもへの期待

子どもに期待する進学先は、大学院までの進学を期待する親が1994年の17.7%から2011年の45.3%と大幅に増え、短大や高校まででよいと考える親がほとんどいなくなったこと、医学部への進学を期待する親がかなり減ったことが顕著な変化である。今回の調査対象者は幼児の親であることを考えると、半数近くが大学院への進学を期待しているという現実には、中国都市部の親たちが以前にもまして学歴への期待やこだわりが強くなっていることを示している。

その一方で、将来ついてほしい職業をみると、かなり現実的に考えている。すなわち、医師や大学教授になってほしいと期待する親も依然として少なくはないが、具体的な職種を希望する親の割合は「その他」も含めて低下し、「本人の適正

による」と考える親の割合が1994年の5.7%から68.0%と大幅に増えている。これは、1994年の日本の親の傾向と類似している。

次に、子どもが大きくなってからどのような生き方をしてほしいと考えているかについてみてみよう。

表8 一人っ子が子どもにとって問題だと思うこと

	1994	2011
甘やかされてわがままになる	81.9	57.5
親がなんでもしてやる	38.6	22.8
子どもに関わりすぎて子どもにストレスがかかる	13.6	18.3
遊び相手が少ない	61.1	75.2
兄弟姉妹のかかわりがなく、能力や社会性が育ちににくい	53.0	57.2
親の期待が大きき、子どもの負担になる	51.1	39.4

表9 一人っ子を意識して気を付けていること

	1994	2011
子どもにできることは子どもにさせる	77.0	73.5
友達とのかかわりを子どもに勧める	72.2	90.1
規則を守ingことをしっかり教える	78.5	56.1
子どもに期待をかけすぎないようにする	15.3	38.5
友達と出会う機会を作る	44.7	77.6
地域の子どもの行事に参加させる	72.4	82.4
ほしいものがあってもできるだけ我慢させる	19.9	31.8
親子が一緒にする機会をできるだけ多くする	49.3	64.7
勉強よりも遊びを大切にする	17.8	41.9
人のためにつくすことの大切さを教える	75.7	64.1
家のお手伝いを多くさせる	24.5	45.0
できるだけ厳しくしつける	58.9	23.1
親孝行の大切さをしっかり教える	88.8	70.6

表10 子どもに期待する進学先

	中学校	高校	短大	大学	大学(医学部)	大学院	その他
1996年	0	5.6	13.5	37.8	21.8	17.7	3.6
2011年	0	0	1.2	34.5	9.2	45.3	9.8

表 11 将来ついてほしい職業

1994 年	2011 年
① 医師、医療関係 (20.1%)	① 本人の適正による (68.0%)
② 公務員、会社員 (12.8%)	② 医師、医療関係 (10.5%)
③ 大学教授 (11.5%)	③ 学校の先生 (5.0%)
④ 学校の先生 (8.3%)	④ 大学教授 (4.2%)
⑤ 技術者 (6.6%)	⑤ 公務員、会社員 (3.9%)
⑥ 本人の適正による (5.7%)	⑥ 技術者 (0.8%)
⑦ その他 (34.0%)	⑦ その他 (6.6%)
⑧ わからない (1.0%)	⑧ わからない (1.0%)

表 11 からわかるように、「趣味を持ち、楽しく生きる」が最も多く、「自分と自分の命を大切にする」は 20%以上増加している。これに対して「経済的に豊かになる」、「仕事を大切にする」はいずれも減少している。

経済発展の中で、経済的な豊かさを求め、そのために仕事を大切にする生き方を望む親が多いことが予想されたが、少なくとも今回の調査では逆の結果が出てきている。今回の調査対象者は少なくとも中流以上の経済的にはある程度恵まれた階層であり、自らは経済的な豊かさを求めながら、子どもには高学歴を期する反面で心豊かな生活を望むようになってきているのかもしれない。

「親に孝行する」、「お年寄りを大切にする」は依然として高い割合を保っている。中国の伝統的な思想である儒教思想が、経済発展に邁進する中でも依然として根強く中国人の価値観形成に影響しているといえるだろう。

#### 育児行動

次に具体的な育児行動を見てみよう。まず、両親のいずれが子どもに対して厳しいと考えているのだろうか。

2011 年では、母親、父親、両方の順であり、両者を含めて厳しいとする回答がわずかながら増加し、両方優しいが減少しているもののあまり大きな変化は見られない。

いうことを聞かない、物をほしがる、食事を残すという具体的場面での対応について尋ねてみた。

いうことを聞かないときで目立つのは、「たたいてでもわからせる」、「たたかないが厳しくする」という厳しい対応が減少し、「わかるように話してきかせる」という対応が 32.9%から 62.4%と 2 倍近くに増えたことである。「子どものしたいようにさせる」という放任的な態度もほとんど見られなくなった。このことは、前述の「一人っ子を意識して気をつけていること」で、「できるだけ厳しくしつける」が 58.9%から 23.1%に減少

表 12 子どもに望む生き方

	1994	2011
経済的に豊かになる	57.3	44.2
仕事を大切にする	62.0	44.8
仕事より家庭を大切にする	7.0	9.1
親に孝行する	85.3	78.6
お年寄りを大切にする	77.2	68.8
貧しい人、困っている人につくす	35.9	43.9
神仏を大切にする	3.6	3.4
国のためにつくす	73.7	67.0
自分と自分の命を大切にする	53.0	76.7
趣味を持ち、楽しく生きる	76.5	83.8

表 13 両親のどちらが子どもに厳しいか

	1994	2011
父親	29.1	34.4
母親	36.3	43.3
両方厳しい	15.0	10.9
両方優しい	19.6	11.5

表 14 子どもがいうことを聞かないとき

	1994	2011
たたいてでもわからせる	17.7	6.7
たたかないが厳しく叱る	32.9	26.6
わかるように話してきかせる	32.9	62.4
子どものしたいようにさせる	14.1	1.2
ほおっておく	2.4	3.0

表 15 物を買ってほしがるとき

	1994	2011
できるだけ買う	23.8	54.1
ときどきは買う	40.8	10.9
どうしてもほしがれば買う	6.9	19.6
親が決めたものだけ買う	28.2	15.4

表 16 子どもが食事を残したとき

	1994	2011
絶対に全部食べさせる	3.7	3.6
できるだけ全部食べさせる	42.1	29.7
無理なら残させる	46.3	62.4
残しても何も言わない	4.1	4.4

表 17 いけないと思いながら子どもにしまうこと

	1994	2011
叱るとき子どもをたたく	23.0	48.0
厳しく叱りすぎる	6.5	18.4
叱るべきときに叱らない	13.5	13.3
子どもができることを親がする	44.2	61.9
させたいことでも子供が嫌がればさせない	40.0	39.6
子どもが好きな食べ物だけを与える	31.1	24.2
子どもがほしがるものを買い与えすぎる	39.7	18.5
必要以上に物を与える	18.5	23.8
子どもに期待をかけすぎる	27.9	11.4
遊びよりも勉強を大事にしすぎる	19.7	21.8
してはいけないことをしたとき、つい許してしまう	5.1	10.6

表 18 育児上困ること

	1994	2011
しつけ方叱り方などがわからない	32.6	43.8
子どもに接する時間が少ない	34.5	16.0
近所に遊び友達がいらない	19.3	34.7
育児の考え方、子どもへの接し方が家族間で食い違う	11.1	26.9
家族が育児に協力してくれない	12.5	10.0
子どもがひとりのとき、見てくれる人がいない	35.9	5.2
育児の相談相手がいらない	10.7	44.6

していることとも対応する。このことからわかるように、丁寧という西欧的子ども中心的発想が徐々に浸透している様子をうかがうことができる。

物を買ってほしがるときでは、「できるだけ買う」が23.8%から54.1%へと増加し、「ときどきは買う」が40.8%から10.9%へと大幅に減少している。また「どうしてもほしがれば買う」は増加し、「親が決めたものだけ買う」は減少している。前述の「一人っ子を意識して気をつけていること」で、「ほしいものがあったてもできるだけ我慢させ

る」と考える親の割合は増加しているが、現実には一人っ子でかわいいし大事という気持ちと、経済的に豊かになった余裕から、つい買ってしまうということであろう。

子どもが食事を残した時では、「できるだけ全部食べさせる」が減少し、半数以上の親が「無理なら残させる」と回答している。中国にはもともと食事は残してもかまわないという文化があり、できるだけ全部食べさせようとする日本の親とは考え方が異なるが、ここでも子ども中心、言い方を変えれば甘やかす方向への変化がみられる。

いけないと思いながら子どもにしまうことについてみてみよう。1994年の調査では、「子どもができることを親がする」、「させたいことでも子供が嫌がればさせない」、「子どもがほしがるものを買い与えすぎる」などの回答が多く見られた。今回はこの中で「子どもができることを親がする」は増加し、「子どもがほしがるものを買い与えすぎる」は減少している。また、「叱るとき子どもをたたく」という回答も倍増している。「子どもに期待をかけすぎる」は大幅に減少している。「子どもができることを親がする」、「叱るとき子どもをたたく」はいずれも好ましくないことという意識が定着してきたことを反映しているものと考えられる。「子どもがほしがるものを買い与えすぎる」については、前述のように、実際にはほしがれば買うという親が多く、我慢させたほうが良いとは考えながらも結局は買い与え、さほど問題だとは思わないというところだろうか。

#### 育児の心配事

1994年の調査では、多くの中国の親は子供が一人っ子であることから、日本に比べると子どもの心配事が多いという傾向が認められた。このあたりはどのように変わってきているだろうか。育児上困ることから見てみよう。

表17からわかるように、「子どもがひとりのとき、見てくれる人がいない」、「子どもに接する時間が少ない」が大幅に減少し、「しつけ方叱り方などがわからない」、「近所に遊び友達がいらない」、「育児の考え方、子どもへの接し方が家族間で食い違う」、「育児の相談相手がいらない」が増加している。なかでも「育児の相談相手がいらない」が4倍以上増加している。

すでに述べたように、中流以上の家庭を中心に専業主婦の割合が増加し、子どもと接する時間が増えてきたことを反映して、子どもを見てくれる人がいないことや接する時間の短さに悩む親は減少する半面、子どもに接する時間が多くなるほど、

表 19 子どもについての心配事

	1994	2011
食事の好き嫌が多い	24.0	13.2
食事の量が少ない	29.7	21.2
病気になることが多い	11.3	21.8
体が弱い	15.7	7.4
太りすぎ	4.1	5.6
わがママが強い	35.9	32.0
ぐずぐずする	19.0	22.5
よくかんしゃくを起こす	16.3	24.3
弱虫、臆病	23.5	19.2
親の言うことを聞かない	18.9	10.0
やる気がない	9.6	3.5
よく嘘をつく	4.1	1.2
規則を守らない	13.7	9.3
兄弟、姉妹がいない	13.4	26.8
あまり人と話さない	9.0	8.8
友達を作ろうとしない	7.7	5.6
友達や小さい子をいじめる	3.3	1.4
悪い友達がいる	4.1	2.2
勉強ができない	19.7	13.0

表 20 心配事の相談相手

	1994	2011
夫または妻	93.5	87.8
自分の母	50.1	40.8
自分の父	16.1	15.2
夫または妻の母	22.9	18.0
夫または妻の父	8.3	5.0
自分の兄弟姉妹	23.7	2.2
夫または妻の兄弟姉妹	10.5	1.5
自分の友達	36.3	33.7
幼稚園の先生	87.9	80.6
小児科医	69.0	64.8
精神科医	3.8	3.7
心理学の専門家	34.5	36.0
公的相談機関	22.0	20.3
相談相手がいない、相談しない	15.9	4.9

子どもへの接し方や遊び友達、家族間の食い違いなどの問題が生じてきて、かつ祖父母との同居率が低下し夫は仕事が忙しいという、日本と似たような状況が起こっているものと思われる。

子どもについての心配事をみると、全体としてあまり大きな順位および数値の変化は見られないが、「兄弟、姉妹がいない」が倍増しているのが

表 21 理想とする老後の生活形態

	1994	2011
自分の子どもや孫と同居生活する	65.8	43.9
夫婦だけで自分の家で生活する	29.3	39.4
老人ホームなどで生活する	2.4	9.3
弱くなったら同居生活する	2.6	9.6

表 22 老後の生活資金

	1994	2011
年金や貯金だけで生活したい	80.9	94.1
ある程度子どもからの援助を期待する	12.2	2.8
その他（働けるだけ働く、など）	6.9	5.1

目立つ。その一方で「食事の好き嫌い」や「食事の量」などを心配する親は若干少なくなっている。

心配事の相談相手では、全体として大きな変化はなく、夫または妻、幼稚園の先生が非常に多い。そのなかで「自分の兄弟姉妹」、「夫または妻の兄弟姉妹」という回答が大きく減少しているのが目立つ。これは今の親が一人っ子世代で、兄弟姉妹がいないという事情を端的に物語っている。自分もしくは配偶者の両親に相談する者の割合がわずかながら減少しているのも、祖父母同居率が低下し、いわゆる核家族化が進んでいることを反映しているものと考えられる。この点もかつての日本の状況と類似している。

### 老後の生活

日本と同様中国でも、少子高齢化のなかで、老人の社会保障をどうするかが大きな問題になっている。この問題は我が国よりもはるかに深刻であると考えられる。

現在幼児を持つ若い親はこのことをどのように考えているのだろうか。理想とする老後の生活形態と生活資金について尋ねてみた。

かつての中国では、祖父母同居が当たり前であり、多くの家庭は同居家族、大家族であった。しかしながら、都市化の進行とともに夫婦と子どもだけの核家族が増え、結婚後も親との同居を嫌う若者も増えたという。それでも、1994年の調査では全体の3分の2の親は老後自分の子どもや孫と同居生活することを望んでいた。今回の調査ではこの数が5割を下回り、逆に「夫婦だけで自分の家で生活する」、「老人ホームなどで生活する」と回答するものが合わせて17%増加している。老後の生活資金については、年金や貯金だけで生活したいが増える一方で、ある程度子どもからの援助を期待する者は非常に少なくなっている。こ



のあたりにも欧米的な価値観が進行している様子をうかがうことができる。

## 文 献

- 田中敏明・照屋博之 1996 日本、韓国、中国の  
子どもの生活と子どもを持つ親の育児—幼  
児と小学校5年生を対象にした実態調査—平  
成5年～平成8年文部省科学研究費補助金(大  
学間共同研究) 報告書 1-16
- ベネッセ教育総合研究所 2011 第4回幼児の生  
活アンケート報告書 ベネッセ教育総合研  
究所
- 日本貿易振興機構(ジェトロ) 2012 中国の地  
域別労働環境
- 姜波・佐々木正美・八重樫牧子・徐祖瓊・石川瞭  
子 2002 岡山・上海・大連における子育て  
に関する比較考察 川崎医療福祉学会誌  
No.2 197-208
- 許艶鳳・片桐智佳・岡田弘 2010 子育て事情に  
関する日中の比較考察 東京成徳大学臨床心  
理学研究 10号 16-27

